

## 『障害者在宅就労シンポジウム』・パネルディスカッション

開催日時：2002年12月9日(月曜日)

開催会場：パークタワーホール(新宿区西新宿3-7-1)

主催：特定非営利活動法人 ウィーキャン

共催：社団法人 日本テレワーク協会

### パネルディスカッションテーマ

『障害者があたり前に働ける社会を目指して』

### パネラー

濱田英雄氏(株式会社ユーディット主任研究員)

堤 幸男氏(社団法人日本テレワーク協会主席研究員)

豊田崇克氏(株式会社ネクストウェア代表取締役社長)

亀井貴也氏(Web Accessibility Group代表、在宅就労実践者)

玉木文憲氏(障害者在宅就労支援センター/ウィーキャン副理事長)

司会：柴田郁夫氏(青森大学助教授)

### 司会(柴田)

このパネルディスカッションの司会を担当いたします、青森大学の柴田と申します。ウィーキャンの顧問をいたしております。

このシンポジウムを通して、障害者が在宅で就労していくにはどうしたらいいか、また、企業から仕事を得たり、企業に勤めたりするにはどうしたらいいかといった、最初の一步を歩み出すためのきっかけを得ていただきたいと考えております。

そこで、このパネルディスカッションでは、『障害者があたり前に働ける社会を目指して』というテーマで、皆さんにお話していただきたいと思っております。まず濱田さん、亀井さん、玉木さんという3人の障害者の方々。そのあと、豊田さん、堤さんという順番でお話をさせていただきます。

濱田さんは、今ユニバーサルデザインによるホームページ作りなどの仕事をなさっており、障害者の中でとても有名な方です。しかし、一朝一夕で有名になったのではありません。これからお話いただくのは、最初に仕事を始められたころのことから、現在有名になれるまでの、その内容です。

では、濱田さん、よろしく申し上げます。

### 濱田

50年の人生を、6～7分で説明するのは非常に難しいのですが、長くならないようまとめてお話いたします。

私は、ご覧のとおり両手の指がありません。足も同じです。これは先天性で生まれたときからですが、歩くことや日常生活に支障はありませんので、障害者としては非常に軽いほうだと思っています。

50年も昔の話ですから、小学校とか中学校に、まだ特殊学級はなかったのですが、テストケースという形で、幸運にも普通の学校に入ることができ、そのあと職業訓練校の写真植字課に入所しました。ここで習うのは印刷関係のもので、活字ではなく、写真の原理を応用して光学的に文字を作るというものです。職業訓練校を出て6年ほど印刷会社に勤めた後、独立して20数年になります。ただ、皮肉なことに、急速に普及してきたワープロやパソコンに写植の職業が押されて、最後には家賃6万円の事務所に売上が10万円ぐらいしかない状況になり、キャベツの芯をかじりながら、かろうじて生活をしている状況になりました。けれども当時、パソコン通信を通してできていたネットワークの中に、たまたまいらっしゃった鋳物会社の管理部の部長さんの紹介で、断然場違いな鋳物会社の総務部にとりあえず入りました。2年ほどして本社が移転したのを機会に、元来会社勤めは嫌いでしたし、せっかくパソコンを覚えたのだから、それを使って何かしてやろうと退職し、一軒家を借りて、住みながらパソコンを使った仕事を始めました。しかし、もちろん最初から仕事があるわけではなく、食べていくのがやっとの状況でしたが、パソコン通信を通してネットワークが広がっていたおかげで、いろいろなところから入力の仕事や、ホームページ作りの仕事を少しずつただけていた状況でした。

あるとき、雑誌に障害者や高齢者にやさしいホームページを作るための世界基準となるガイドラインの、草案レベルのものが載っていました。これはもしかすると、私が障害者自身であること、視力が0.05しかないこと、学歴がないこと、これらが売りになるかもしれない。また、ある程度歳を取っているので、10代20代のデザイナーではできなくて分からないことも少しは分かるので、私に向いているのではないか。もしかすると、そういう付加価値を付けたホームページを作ることで、仕事になるかもしれないと思いつき、勉強してそういったホームページを作るようになりました。

そんな中で今の会社、株式会社ユーディットの社長に引き抜かれ、主任研究員の形で入社することになりました。ユーディットは株式会社ですが、『情報のユニバーサルデザイン研究所』となっています。

ユニバーサルデザインとは、バリアフリーのように後から付け加えていくのではなく、誰にでも、より多くの人に、使いやすいように、最初のデザイン段階から設定して、ものを作っていき考え方に基づいて作られたものです。わが社は、それらの中でも、ITを使ったもののユニバーサルデザインを考えていく会社です。従業員は5人しかいません。全員在宅でSOHOという形で仕事をしています。従って会社には誰もいません。事務所は便宜的に社長の家になっていて、週に1度だけ出社する状況です。従業員は5人ですが、インターネットのネットワークを使って登録社員を募集していて、現在140人ぐらいが登録しています。そのうち半数近くが高齢者か障害者です。当社では、障害者や高齢者の方に、はるかに仕事がありますので、できればそのような方に来ていただきたいと思っています。

私は、ホームページを作ることもありますが、これは最近少なくなり、企業

のユニバーサルデザインに関するガイドラインを作ったり、ホームページの内容ができていないかどうかの調査をしたり、コンサルティングする仕事をしています。

このように、私にとっていろいろなチャンスは、パソコン通信時代からの人のネットワークによって、より多くの人と知り合うことで生まれてきました。うまいチャンスを見つけてそれに乗ったことと、いろいろな人に助けられてこの現状があるのだと思います。

司会

濱田さん、ありがとうございました。引き続き亀井さん、お願いします。

亀井

北海道の札幌からまいりました亀井です。僕の障害は、生まれたときに脳性麻痺にかかり、利き手と言葉が少し不自由なだけで、日常生活には全く支障がない状況です。濱田さんと同じ、ユニバーサルデザインを中心に在宅ワークを実践しております。そのきっかけとなったのは、ウィーキャンのメーリングリストに流れていた募集で、そこで知り合ったメンバー達とは今も活動を続けています。

この活動は僕が主体となり、在宅ワークのチームを作ってみようということに賛同してくれたウィーキャンの会員が、全国各地から10名程度集り、メーリングリストを使って行っています。このメーリングリストには、ウェブアクセシビリティとかユニバーサルデザインについて、ある程度難しいことが書かれています。そしてそれらを実際に作る場合に、実践的な面で、どう作ればいいのかという会話を繰り返しています。この会話の中から、ユニバーサルデザインのページ作りが、障害を持っていても、言い方を変えれば、障害を持っている人こそ簡単にできる、そういった方法を見つけることができました。そして機会があれば、その手法を使ってウィーキャンと協働歩調していくことができれば良いと思います。

司会

どうもありがとうございました。今のお話にもありましたが、亀井さんには、ウィーキャンのなかでユニバーサルデザインのホームページチームを作り、実際に官公庁関係の仕事をしていただいております。ユニバーサルデザインをテレビ会議などの手段を使って、もっとウィーキャンのメンバーに広げていくための先生もお願いすることになっています。

では引き続き玉木さんお願いします。

玉木

皆さんこんばんは、大阪からまいりました玉木と申します。大阪からまいりましたとは言いましても、僕は大阪弁がまったく話せません。といたしますのも、昭和24年に神奈川県茅ヶ崎で生まれて、ずっと東京、神奈川県あたりで

育ってきております。頭は薄くなってきておりますけれども、元湘南ボーイです。どうかよろしくお願いします。

高校を卒業して、昭和44年に、東京の、皆さんご存じかと思いますが、渋谷の西武百貨店に入社いたしました。ずっと婦人服ファッションの畑を歩いてまいりまして、昭和60年に大阪転勤になり、大阪に住んで今年18年目に入ったところです。西武百貨店を平成5年に退職して、現在はいろいろな雑誌とか新聞に記事を書かせていただくライターの仕事をしております。今お話をしました濱田さんや亀井さんと違い、ウィンドウズ名物のフリーズが起こっても、対処の仕方が分からずスイッチを押して消してしまうような、その程度の人間です。

私は今車椅子に乗っていますが、脊髄の進行性の病気で、昭和54年に発病しました。世間では差別用語ですが、びっこをひいて歩いていまして、それから杖をついて歩き、平成3年から車椅子に乗っています。ですから私は軽度の障害者、中度の障害者、これを体験してきています。しかもサラリーマンとしてそれらを経験しています。

今現在中度、軽度の障害をお持ちの方でしたらお分かりかと思うのですが、その程度の障害者は、日本の福祉施設からはまったく注目されていない、「お前なんぞ障害者じゃないぞ。」と、まったく無視されているような状態だと思います。実際、サラリーマンをしていて感じたことですが、これだけ上半身が達者で口も減らない男でも、足が動かないというので、厄介者、できそこないのように見られていました。ですから今、お酒の飲み過ぎとか、おいしい物の食べ過ぎなどで頭の血管が切れたり、糖尿病で目が見えなくなったり、足を切断したりする中高年の方がとても多いですが、そういう方々の気持ちがよく分かります。

今は元気な私も、5年前に1年間寝たきりの体験をしました。脊髄性の進行性の病なので、寝たきりは避けられないと思ってはいたのですが、毎日毎晩「死にたいなあ、もう僕なんかこの世でお役目終わったんじゃないかな。」という地獄の日々を過ごしておりました。その直前のバブル真最中に、とても高いマンションを買い、よせばいいのに障害者年金をローンの返済に使っておりましたので、働かない、まったくお金が入ってこない中で、しっかりローンの支払いだけは続けられていたのですが、死にたい時期を通り越したとき、やはり仕事が欲しいなと思いました。

そんなとき、ある朝新聞をめくっていましたら、先ほど最初に挨拶されました上條さんの、決して美しくない顔が写真入で出ておりました。それは、東京にウィーキャンという団体ができ、それは僕ら障害者が、在宅で仕事をやっていけるような団体だということで、正直申しあげて、仕事が欲しくてウィーキャンに入りました。ただウィーキャンに入りましたものの、仕事なんてまったく来ません。ましてや東京と大阪は離れていますから、普段からコミュニケーションがありませんでした。そんな折、身体が若干具合の良いときに、滋賀県大津市で行われた琵琶湖会議で上條さんとお会いすることができました。これ

がものすごいチャンスだったなと思います。

ところが、実際にウィーキャンの活動をやっていくうちに、このウィーキャンを作ってきた理事の皆さんの、1円も儲からないくせに、皆のために身を粉にして働いている馬鹿さ加減にすっかりほだされてしまい、上條さんからの電話1本で理事に就任して、今では副理事長として、あとでお話しする大阪の在宅就労センターを開設させていただくようになりました。すっかり泥沼人生になってしまいました。

ただ実際に、ウィーキャンの活動をやっていて嬉しいことが3つあります。まず一つ目は、自分自身がそうであったように、障害を持っていると、この世で一番かわいそうな人間は自分だと思っていることが多いのですが、そういうかわいそうな方々が、上條のような生意気な障害者になっていくことです。二つ目は、社会が少しずつ僕たち障害者に視線を向けるようになってきてくれたことです。私もこの2ヶ月だけで、こんな高いところに7回もお呼びがかかり、皆さんの共感を得ていることから、我々のしている活動は間違いではないのだと感じさせていただいております。三つ目は、痩せてしかばねのようだった自分が、こうやって元気で仕事をしているうちに、頭は薄くなってきましたけれども、身体は太くなってきまして、皆さんご覧いただいてもお感じになるように、車椅子に乗っていなかったらただのいやらしそうなオヤジだと思われるほど、元気な自分になれたことを、とても嬉しく思えることです。

今、濱田さんと亀井さんのお話を聞いて、もしかしたら会場にいらっしゃっている皆さんは、「自分たちとはちょっと違うなあ。」「あの人達だからできたのだよなあ。」と思う部分があるかもしれません。ただ、咲いている花だけを見て判断しては間違いだと思います。どういう種を蒔いてきたか、どういう土壌をこしらえてどんな肥やしをまいて、どのぐらい頻繁に草むしりをしてきたかということ、今日はぜひ感じとっていただきたいと思います。

## 司会

どうもありがとうございました。3人の障害者の方で、働いておられる方からお話をさせていただきました。きっかけはパソコン通信であったり、あるいは、ウィーキャンの情報をなんらかの形で手に入れたりして、そこからネットワークを広げていったところが、最初の歩み出しだったのだと感じました。

これからお話してくださるのは、株式会社ネクストウェアの豊田社長です。豊田社長は20才のときからの叩き上げで、その会社を上場まで持っていかれた方です。また、玉木さんの紹介で障害者の方を雇ったご経験もあり、雇う側、仕事を出す側から、どういう障害者だったら仕事を出せるのか、雇えるのかというお話をさせていただくことになっています。それではよろしくお願いします。

## 豊田

株式会社ネクストウェアの豊田です。今ご紹介がありましたが、このテーマ

は、ただでさえ非常に難しく考えてしまいそうなテーマですが、企業側からの立場では、やはり正直に難しいと思います。我々の経験上、どういう方を企業は社員として雇用、または契約するのかを簡単にいえば、結構厳しく平等に見ています。意外に企業は、身障者の方だからとは考えません。企業の仕事の中には、バリアフリーという問題はありません。そういった中で、私もテレワーク協会という、在宅勤務のテレワーカーを支援する社団に入らせていただいています。しかし、我々はどういう形に仕事の仕方が変わるのかを勉強しなければならない、というのが今の現実です。わが社の入っているビルは、バリアフリーになっていません。車椅子の方が通勤する形態も非常に厳しいと思います。上場しても大会社ではなく、まだまだベンチャーの若手ですから。

コンピュータのソフト開発会社をやっているとしても、環境が大きく変わってきています。ADSLなどのブロードバンドが普及してきましたが、ISDNでは通信速度が遅く、在宅勤務は難しかったと思います。しかし今、ケーブルテレビのネットワークや光ファイバーなど、100メガビットというネットワーク上では、情報が早く取れたり、逆に会社側からかなり大きな情報を家に流したりしてもスピードが速いです。これが今後10年たたないうちに1、2テラビットの通信速度が可能になるといわれています。実際にどういった感じかという、自宅で映画監督ができる感覚です。壁にテレビとかスクリーンを貼っておいて、「馬鹿、そこ、足上げろ。」などといえば、現場に伝わるらしいです。

そういう環境にあって、上司、部下、組織といった、事務所や会社で働く感覚、まさにそういうものを、我々こそが変えなければいけない、変わらなければいけないというのが今の現実です。そういう面で、企業の中で身体障害者の方であるとか、シルバーの方、また、新人、新卒という垣根が、私の会社ではなくなっていると思います。あるのは『何ができるか』なのです。ポイントとして、「私はこれができます。」「こういうことができます。」といったことが、今後重要になっていくのではないのでしょうか。

プログラミングの国家試験がありますが、私どもの会社は、ある程度資格を取らないと給料が上がらないので、うちの社員も半泣きで勉強しています。私はそういったことは嫌なのですが、プログラマーでも自称プログラマーとか、自称システムエンジニアは、やはり通用しません。この件は、ここの部分だけ見れば、年齢とか男女とか、強いとか弱いとか、そういうものは関係ないように思えます。しかし、実際は資格を持っているだけでは駄目なのです。誰がどこから見てもプログラマーでなければいけません。私の就職した頃、実はプログラマーとして就職したのですが、その当時、1ヶ月の労働時間が470時間だったことがあります。労務局へ持っていったら訴えられるだろうなと思っていました。これは、逆算しますと1日2時間しか自分の時間がないのです。私は毎日コンピュータの前に新聞を敷いて寝る状態の作業環境の中で、半年ぐらい生きてきました。本当の血の涙を見ました。悲しくて出るのではなく、半年もその状態が続くと粘膜の弱いところから全部出血していくのです。我々もそ

ういう努力をしています。

こういった、自分のやりたい信念とか、そういうものを育てていくことが非常に重要だと思います。自分のプライドを少しずつ成長させていくために、いろいろな技術を習得していくのには時間がかかります。そういうものです。コンピュータを覚えたからといって、それだけで食べていけるかということ、たぶん、食べていけません。我々でも食べられないのですから。うちの社員でコンピュータが触れるからといって、それだけで内定をもらった人間はいません。学生のときに、なんらかのテーマをやってきましたという人間が採用されます。たぶん、どこの企業でもそうなっていくと思います。

このように「私はこういうことができます。」というのが非常に大事ですが、もうひとつ、ネットワーク社会になりますと、皆さんやっていると思いますが、メールなどの表現方法を勉強しなくてはなりません。皆さんに、メールのように相手の顔の見えないコミュニケーションを身につけていただいて、それを提供するマーケットができるかもしれません。私は、メールで文章を書くことがとても下手です。中味がない文章になってしまいます。このメールを書いて送るとか、ネチケットをチェックしていただく仕事を、皆さんにお願いして代行してもらうような、そういう仕事が今後あるのかもしれませんが。

要は皆さんが自分のマーケットや、自分の仕事を、自分で作れる時代になったのです。自分のアイディアで食べていける世の中になってきたのです。そこに関しては皆平等です。歳も男女も能力も変わりません。そういった独自性を、ウィーキャンという集まりで育てていくことが非常に重要であり、そういうところを企業が見れば、仕事を出すとか、働いてくれとかではなく、同じテーブルに座って、一緒に仕事をしようということになると思います。このような関係を作れることこそが、ネットワークであり、ブロードバンドだと信じて疑いません。我々テレワーク協会として、そのようなことを上條さんと一緒にやっていますので、ぜひよろしくお願ひします。以上です。

司会

どうもありがとうございました。健常者が聞いても、ある意味では厳しいお話だったと思いますが、裏を返せば、健常者も障害者もないというお話でした。今日はマイクロビジネスのお話がいろいろ出ていますが、個人として、自ら仕事を作り出していけるのではないかということでした。

豊田社長はテレワーク協会の会員でもありますが、最後のお話は、その日本テレワーク協会の中でも、特にマイクロビジネス協議会をずっと担当してこられた堤主席研究員からお話いただきたいと思います。よろしくお願ひします。

堤

皆さん、こんばんは。テレワーク協会の堤でございます。今日は素晴らしい会合に、ウィーキャンさん主催のすぐ下に、共催で私どもの協会の名前を書かせていただいて、たいへん喜んでおります。『障害者在宅就労シンポジウ



ム』、そしてその上に『障害者が当たり前前に働ける社会を目指して』というたいへん素晴らしいタイトルのシンポジウムだと思います。

今、テレワーク協会とマイクロビジネス協議会の話が再三出てきていますが、ここはどんなことをしているのかなどのご紹介をして、それから、我々をもっと使っていただくにはどうしたらいいのかも含めてお話をしたいと思います。

私がテレワーク協会としてあちこちにお話に行きますと、「テレワークって何」といわれます。我々は当たり前だと思っているのですが、社会一般ではまだテレワークなんて分からないという人もいっぱいいます。それで私は、テレフォンのテレ、テレビのテレと同じですということです。テレフォンもテレビも、遠くで、離れて、という意味です。そうすると、遠くで離れて働くのがテレワークになります。では、遠くで離れて働く条件は何かというと、私はそれが、20世紀が残した最大の遺産だと思っています。

20世紀についてはいろいろな弊害がいられています。一極集中とか、公害とか、あるいは大きい企業や組織が崩れていくことなどです。このように弊害もありますが、前の世紀が残した素晴らしい遺産もあり、それが情報通信ネットワークだと思います。情報通信ネットワークの進展によって、いろいろな仕事ができってきました。いろいろな働き方ができるようになりました。我々は、前の世紀には考えられないような働き方をすることができるようになりました。それが在宅就労、情報通信ネットワークを使った働き方です。私は今日ここに来る前お昼に、幕張で、ある女性ネットワークの会合に出ておりました。だいたい3~40人の会合でした。そこでは、ほとんどの女性が、福岡と大阪で、パソコンテレビでネットワークを結び、大きく画像を映しながら会議をしていました。そこで、テレワークだとかマイクロビジネスのお話を説明しますと、すぐさまその会場の方ではなく、福岡の方から「これはどうなっているのですか。」「どうなのですか。」という問い合わせが参ります。テレワークというのは新しい働きかたですが、これは情報通信ネットワークやITが生んだ新しい会議の仕方です。

こういう新しい技術や、テクノロジーが生まれると、新しいビジネスチャンスもいっぱいできます。先ほどの加藤先生のマイクロビジネスのお話は、大きな組織にいなくても働けます、個人が自分の好きな場所で働けますというお話でした。私は仕事柄日本全国へでかけます。つい最近沖縄県の宮古島に行ってきました。東京から直行便は出ていますが、57,000人の島で、そこには、離島で住んで、離島で観光、あるいは漁業だけでなく、ネットワークで仕事をしている人がたくさんいました。これは別に離島だけではなくて、山間過疎地にもいえることです。我々の協会は、こういう方々がビジネスができる、お金を稼ぐチャンスが出てくることを支援する活動をしております。そしてこういう働き方は、まだ最近でできたばかりです。

このように在宅で働いている方は、全体から見たら先ほどの「テレワークなんて知らない人いっぱいいますよ。」というお話のとおり、まだまだ少数で



す。個々の人が自分の好きな場所で、たとえば介護をしながら、あるいは地域で生きながら仕事をする、お金を稼ぐ、このような働き方が多数になる時代は、21世紀になってからだと思います。

そういった働き方を、我々の協会として、マイクロビジネス協議会という協議会を作って、経済産業省とか国土交通省、総務省、厚生労働省に働きかけて、いろいろな支援策を引き出す活動で支援しています。はっきり申しあげますと、国や行政、市町村はテレワークとかマイクロビジネスをどうやって支援したらいいのかまだ分かっていません。従って、市町村の担当者に、テレワークの、あるいは在宅就労の支援の話をして「必要ですね。」とはいいますが、では「うちはこの支援をしています。」とは、ほとんどどこでも聞けません。

そこで、これから21世紀のこのような働き方が一般化するためには、2つ必要なことがあると思います。1つは我々や、あるいはウィーキャンのような組織、その他の団体、こういうところが、在宅就労、テレワークで働く素晴らしさをいろいろなところに訴えかけ、支援を引き出し、あるいは大手の企業の支援も引き出していくことが必要です。あと1つは、もうすでに皆様方が再三おっしゃっていますが、テレワークには、テレともう1つ、ワークがついてきますので、仕事という観点でここに参画する人たちに、厳しさをもって、自分は何ができるのかを、自分のオリジナリティは何だということを、ぜひがんばって身につけていただき、それを売り込み、あるいはビジネスに、ワークに参画をしていただきたいと思います。

私どもの協会は、非常に小さな協会ではありますが、テレワークという21世紀の新しい時代の潮流を推進していく唯一の公的な団体です。ぜひ皆様方と一緒に、このタイトルにありますような、障害者が当たり前で働ける社会を、作っていきたいと思います。どうもありがとうございました。

## 司会

どうもありがとうございました。自分の売りを明確にして、テレワークという手段を使っていけば、働きだせるようになるのではないかというお話でした。

最初、濱田さんからもお話があったように、濱田さんがお仕事を始めようとした時代はパソコン通信だったかもしれませんが。今だったらインターネットの電子メールだと思うのですが、そういうものでどんどんコミュニケーションを広げていく、そしてウィーキャンのような、別にウィーキャンだけではないのかもしれませんが、そういうところと接点を持っていくことが、自分の売りを明確にしていくことだったりする。それが働き出す第一歩なのかなと思いました。

次に、玉木さんから、今年大阪に立ちあがりました障害者就労支援センターのことを話させて下さいといわれています。これはまさに、皆さんが働き出す第一歩をサポートするセンターです。玉木さん、ちょっと短めでセンターのこ

とをご紹介してください。

玉木

先ほど加藤先生が、2005年愛知万博、愛知地球博で、障害者就労フォーラムなんて作っていったらどうなのかとおっしゃっていたのですが、そのひとことを聞いて大いに燃えています。

私どもが障害者といっている人には、大きく分けて4種類あると思います。肢体障害者、視覚障害者など、そういう分け方ではありません。まず働く気がまったくない障害者。たぶんこちらの会場にはいらっしやらないと思います。それから働きたくてもなかなか働けない障害者。障害が重度であるとか、そういう方々ですね。それから、働ける障害者という方の中でも、在宅なら働ける、仕事が貰えれば働けるというような方もいらっしやいます。そして、障害がうんと軽度だから、ちょっと不自由はするけれど働ける。こういう4種類の方々がいらっしやると思います。

ウィーキャンが考えているのは、障害者が当たり前前に社会参加できるように、ハンディや不自由さなく、在宅で働くことのできる在宅就労です。先ほどからテレワークという言葉で語られておりますが、テレワークというワーキングスタイルを社会に定着させていくこと、これを在宅就労センターでは狙っています。最初、ネーミングについて、テレワークセンターなんていうのはダメでしょうかと皆さんにお伺いしましたら、やっぱりここは、分かりやすく日本語で名前をつけたほうがいいのではないかとということで、在宅就労支援センターと申しております。

障害者に限らず、少子高齢化が進んで、超右肩上がりの景気回復は、今のところ見込まれません。ただ、このまま日本という国が沈没していかないためにも、すぐれた労働力を確保していくことは重要です。全員が全員優秀な労働力であるわけではないし、また個性もさまざまだと思うのですが、我々にだって潜在能力、表からぱっと見ただけでは見えないけれど、実はこんな力があるのだぞというものは必ずあるはずで。障害者の在宅就労支援センターでは、まずそれを見つけるお手伝いを第一義に考えたいと思っています。ただ、気をつけていきたいのは、優秀な労働力が、今までのものさしでいいいますとちょっと違っています。我々は10年前、20年前までは、産業革命以降2つの戦争を経て高度成長、そしてバブルまでの重・工・長・大産業のような価値観で考えることが多かったのです。ですからたとえば私のように、車椅子に乗っている人間だと、「お前なんて来たって仕事はないよ。」と、それだけで済んでいました。けれども今は、情報化社会、また個の時代といわれています。この情報化社会がどういうものを表すかということ、一つには変化の時代だと思います。変化のスピードがものすごく速い時代。これは最近の子どもたちと話をしていても感じる事なのですが、僕が小さい頃は、医者になりたい、政治家になりたい、野球選手になりたいとか、いろいろ夢があったのですが、今の子どもにはぜんぜんありません。変化が早いので、夢の持ちようがないのです。自分でそ

れにどう対応していったらいいかが分からないのです。その点、僕たちが若い時分には、いい学校を出て、いい会社に就職をしてというような価値観がありました。今はどんどん学び続けていかないと、時代の変化についていけないことに、まず気がつかなくてはなりません。そう思います。

司会

センターの機能とか役割など、時間も押してきているので、端的にお願いします。

玉木

了解です。まずセンターの役割ですが、最初のレベルが低いとって笑わないでください。ほんとうに一人でも多くの方に在宅就労を実現してもらいたいので、こういうふうを考えています。

まず一つは、ITコミュニケーションです。インターネットや電子メールを使って、足で歩いて、また電車に乗って会社に行っている人達と、普通の人と同じように、正確なコミュニケーションができるような人材を育てていくスクールを開校していきたいと思います。そして二つ目が、仮にいろいろな企業さまからお仕事をいただいた場合に、私どもが信頼できる団体、在宅就労をしている人たちの塊として、信頼を持っていただけるような、責任を持てるエージェントを育てていきたいと思っています。それから三つ目、企業の在宅雇用の推進です。ただ、在宅雇用の推進といいますが、こういう変化の時代ですから、先ほど豊田社長もおっしゃっていましたように、自分に何ができるかが大切です。また自分がどういうふうに変化に対応しているかがずれている人は、今現在障害者のリストラは多いですが、これから先もリストラされていく可能性は多いだろうと思います。そういういらない障害者にならないためにも、ウィーキャンは、世の中のニーズを掘り起こす、あるいは世の中のニーズをしっかりと見つめていきながら、在宅就労をする人達の塊を作っていきたいと思っています。これには、企業に対するいろいろなアドバイス、また障害者に対するアドバイス、教育等々も含まれますが、そういった世間からの声に耳を閉ざさないで、どんどん、どんどん進化していき続けられる在宅就労支援センターでありたいと思います。だいぶはしょりました。

司会

どうもすみません。私がいろいろはしょらせていますが、要はITコミュニケーションの教育をして、企業などとマッチングさせようということです。これに関しては、濱田さんや亀井さんからご意見をいただくことになっております。

濱田さんは、株式会社として実際そういう仕事を受けて、障害者の方に、ユニバーサルデザインのホームページを発注して作ってもらったりしています。それでは濱田さんの目から見て、ウィーキャンの大阪でできた在宅就労支援セ

ンターに関してのご意見や課題、問題点等をお聞かせください。

濱田

よく分からない部分もありますが、今までいろいろ話を聞かれて、たぶん、皆さん、就職はとても難しいと思われたと思います。つまり、話を聞いていると、平等であるがゆえにたいへんだと思うのでしょうか、私はもっといろいろな形があつていいと思います。100パーセントそれで食べていくための就労をする必要があるのかという問題もあります。

たとえば、わが社の場合は、登録社員に食べられるほど払えるだけの仕事量がありません。何ヶ月に一回ぐらい、5万10万になるという仕事があつても、百何十人いるわけですから、そんなに簡単に順番が回ってくるとは限りませんし、合った仕事があるとも限りません。100パーセントできる人達もいれば、おこづかい稼ぎにしている方もいます。しかし、おこづかい稼ぎ程度の少しのことでも、社会参加に貢献していけると思います。わが社の場合はネットワークを通じていますから、どんな障害者でもパソコンさえ動かすことができれば仕事ができます。たとえば、「このホームページであなたにとって使いにくいところはどこですか。」という調査があつたとすれば、それは障害があるからこそできる仕事です。そのことで、いくらかの報酬を貰えると、社会と関わることが出来ます。寝たきりであっても、社会に関わることができたことで喜びも出てくると思います。そういった形でもいいと思います。

司会

次に亀井さんいかがですか。

亀井

自分が興味を持ったことに、どれだけこだわりを持てるかということだと思います。僕自身が、ユニバーサルデザインのことを覚えてから、自分のグループ等でそのことばかりを話して、どんどん深めていき、今の日本で、まだ本物は出ていない状況で、その先の状況を考えるように、自分が興味を持っていることの、次のステップを考えることができるか、また、継続していくことができるか。この部分が在宅ワークにとって、売りでもあり、戦略にもなってくるのではないかなと思います。

司会

どうもありがとうございました。今のお二人のお話は、就労支援センターは、それはそれでももちろん重要ですが、やはり自分が何をやるか、何ができるようになるかということこそが、重要なのではないかというご発言だったと思います。

会場でどなたかご質問があれば、お1人、お2人くらいお受けできると思っておりますが、いかがですか。

ご質問がないようでしたら、豊田社長にお話を伺いたいと思います。玉木さ

んのところは、就労支援センターの中の、一つの大きな機能として、教育された障害者の人を企業とマッチングさせて欲しい、していきたいということをやっているのですが、これは別に玉木さんところだけに限らず、ウィーキャン全体として、そういうセンターをいろいろなところに作っていく構想を持っています。豊田社長が企業側から見て、そういうセンターが本当に機能するのかどうかという観点から、少しお話いただきたいです。

豊田

企業側にとって、そういうセンターはある程度機能すると思います。この前も実は、マイクロビジネス協議会でミーティングしていた中で、「ではコンペティタ、いわゆる競合先はどこだという話が出ました。これは、意外に中国ではないかとか、ロシアではないかという話でした。例えば文章をワープロで打って欲しいという仕事を企業が出します。そうすると今、ロシアなどは時差を使って納品してきます。夕方出せば翌日の朝に納品してくるのです。とんでもないスピードです。

実は先ほど、楽屋でこんなことをやったらどうかという話をしていました。僕が非常に興味あることなので動いていることです。今、我々は医療システムを作っているのですが、医療だけでなく、どこの業界でもプライバシーマークというものがとても流行っています。このプライバシーマークは、例えばカルテが全部電子化される電子カルテがあります。このカルテを医師が扱うのですが、それをきちんと、プライバシーを持って預かってくれるかどうかを審査して、「ここの病院はだめだ。」とか、「ここの病院はプライバシーを守っていない。」とかが、そのホームページを見ればわかるような、そういったものがウィーキャンにあってもいいのではないかと思うのです。皆さんにしか分からないことはたくさんあります。「ここの食堂は車椅子がだめだ。」とか、「このメニューは見えない。」とか、そういうものをどんどん審査してしまうのです。ブロードバンド環境の中では、これは非常に大きいです。この道はおかしいとか、そういったものを写メールなどで撮って送ればいいのです。我々のような企業のホームページを見て、これはシルバー、シニア、身障者の方にそぐわないとか、逆にそぐう企業があればウィーキャンという電子シールを発行すればいいのです。これは意外ととても大きなマーケットです。人も非常に多く必要です。皆さんでないと分からないものがあります。そういうことを、ぜひNPOでやると非常に面白いのではないのでしょうか。

司会

センターの新しい機能も、ウィーキャンじゃないとできない、そういうことをどんどんやっていったらいいのではないかということですね。

豊田

そうです。センターもそうですし、何かそんなことを考えてほしいなと思い

ます。面白いと思いますよ。

司会

どうもありがとうございました。